

大学人 インタビュ―

大学の個別選抜改革は 高校現場にどのような影響を与えるか

大阪大 未来戦略機構戦略企画室教授 川嶋太津夫

「高大接続改革実行プラン」では、各大学の個別選抜について、多面的・総合的に志願者を評価して選抜するものへと改善することを大学に求めている。

個別選抜改革に対する大学側の取り組みの現状はどうなっているのか、また、個別選抜改革は、高校の進路指導にどのような影響を及ぼすのかについて、川嶋太津夫教授に聞いた。

大学も評価方法を まだ確立できていない

今回の入試改革では、共通テストとして「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」が導入されると共に、各大学の個別選抜を、アドミツション・ポリシー（入学者受け入れの方針）に基づきながら、各大学が自分たちの求める学生を、書類審査や面接などを通じてより丁寧に選抜するものへと改善することが求められています。志願者の学力を多様な観点から判断できるようになる点で、私は今回の入試改革を評価しています。

ただし問題は、タイムスケジュー

ルです。「高大接続改革に向けた工程表」では、個別選抜改革については、

「2016年度大学入学者選抜実施要項から順次反映」させていくことを求めています。しかし大学は、AO入試のような一部の志願者ではなく、一般入試を受験する数多くの志願者を対象に、その学力を多面的・総合的に評価するための方法をまだ確立できていません。したがって各大学は、徐々に体制を整えながら取り組んでいくことになると思います。また、大学間で評価方法についての情報を交換・共有するための仕組みを

整えていく必要もあるでしょう。

規模の大きい大学においては、全ての志願者に対して、小論文や面接、集団討論などの丁寧な試験を課すことは、困難だろうと考えています。今回の改革では、一般入試、推薦入試、AO入試の区分を廃止することが盛り込まれています。しかし、区分はなくなっても、一般入試の中で、面接や小論文などを重視した方式の入試もあれば、比較的従来の学力試験に近い方式の入試もあるというように、複数の方式の入試が実施されることになるのでしょうか。複数の方式の入試を実施すること

は、「多様な背景を持った学生の受け入れを促進する」という観点からも必要です。というのも、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「主体性・多様性・協働性」という学力の3要素のうち、前者2つの学力に重点を置いた方式の入試もあれば、主体性や協働性が身に付いていることを重視する入試もあるというように、アドミツション・ポリシーに合った入試方式を複数採用することで、大学は多様な学生を選抜することが可能になります。

とはいえ今後は、書類審査や面接などを通じて、志願者の「主体性・

多様性・協働性」を測ろうとする入試の比率が増えていくことは間違いないありません。また、いわゆる従来型の学力試験も、単に「知識・技能」を問うのではなく、記述式や論述式の問題によって、「思考力・判断力・表現力」を測ろうとするものが増えていくと考えられます。

生徒の適性に合わせた丁寧な進路指導が不可欠に

高校の先生方の一番の関心事は、



かわしま・たつお◎名古屋大教育学部助手、神戸大学教育推進機構・大学院国際協力研究科教授などを経て現職。第8期中央教育審議会大学分科会(大学教育部会、大学院部会)臨時委員を務める。

「今回の入試改革で、大学入試が実際にどの程度変わるのか」ということだと思えます。大阪大も、2017年度入試から全学部で「世界適塾入試」を実施し、入学定員の約1割を多面的・総合的な入試で選抜します。ただ、前述したように、各大学は志願者の多様な才能や経験を評価するための方法をまだ確立する過程にありますから、この先5年程度では目立った変化はないかもしれません。しかし、小さな変化の積み重ねの中

で、10年、15年先には大きく変わっていることが予想されます。特に次期学習指導要領の下で学んだ高校生が受験をする2025年度以降の入試は、より「思考力・判断力・表現力」や「主体性・多様性・協働性」を重視したものになるでしょう。

また、高大接続改革実行プランの中で、大学には、ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)、カリキュラム・ポリシー(教育課程の編成・実施の方針)、アドミSSION・ポリシーの3つのポリシーを策定することが求められており、今後は大学ごとの教育や入試の多様化・個性化が進んでいくことになると思われます。そうになると、高校現場の進路指導も、従来の指導だけでは不十分になります。各大学が、どのような学生を育てるために、どのようなカリキュラムで教育を行っているのか、また、入試ではどのような力を測ろうとしているのかを見極める必要があります。その上で、「この生徒の能力を開花させてくれる大学はどこか」を考えながら、アドバイスすることが重要に

なるでしょう。必ずしも難易度の高い大学が、その生徒に適した大学とは限りません。生徒一人ひとりの適性や個性に応じた丁寧な進路指導が不可欠になるわけです。

大学関係者としてぜひ高校にお願したいのは、情報開示の促進です。大学が志願者の学力を多面的・総合的に評価するためには、高校での学習歴や活動歴に関する情報を的確に把握する必要があります。「この生徒は高校時代にどんな学習歴や活動歴を持ち、本学に入学した時に、どのような力をどう伸ばせるか」といった観点で丁寧な選抜を行うためにも、高校側の情報開示が重要なのです。大学は今、様々な教育情報を「大学ポートレート」として公開することが求められています。同様のことが今後は高校にも求められるようになると考えられます。

特に将来、現場で中心的立場となる若手や中堅の先生方は、大学入試改革やカリキュラム改革の動きに常に目を向け、変化を敏感にキャッチしていくことが大切だと思います。